

二水会

会報 105 号



令和 3 年 6 月

姫路南プロバスクラブ

◇ 例 会 ◇

『 姫路南プロバスクラブ・4月例会 総会 』

※ 総務委員会

- ① 総会・4月21日（水）11：00～ホテル日航3F「真珠の間」
* 記念講演・神戸新聞社・執行役員・姫路代表・村上小百合氏
- ② 4月の誕生 中野会長、伊藤康二会員
- ③ 5月例会 姫路南ロータリークラブ 岡本会長・卓話
- ④ 6月例会 会員卓話、広報委員会担当

※ 研修親睦委員会

- ① 親睦ゴルフコンペ 5月24日 白鷺ゴルフクラブ

※ 会 計

- ① 令和3年度前期会費¥15000－5月例会時に納入願います。
- ◎ 役員会開催 4月21日 AM10時 4F “梅の間” にて9名参加、総会について

総会・4月21日（水）11：00～ホテル日航3F「真珠の間」

司会 岡本総務委員長 議長 中野剛会長

① 会長あいさつ 中野剛

② 来賓 姫路南ロータリークラブ 岡本哲待会長、毛利氏、藤塚氏 3名
岡本会長祝辞

③ 出席者報告 14名、欠席6名

④ 第1号議案 令和2年度事業報告 藤原閔男企画委員長 例会5回開催

⑤ 第2号議案 令和2年度会計報告 明石美奈子会計
監査報告 近藤栄一顧問

⑥ 第3号議案 令和3年度役員選出 岡本浩一総務委員長

⑦ 令和3年度業報告 藤原閔男企画委員長

⑧ 令和3年度会計予算 明石美奈子会計

以上議案 全員一致で可決

※役員及び委員会配属

会長 中野剛 副会長 大橋一喜 会計 明石美奈子

総務委員長 岡本浩一 企画委員長 藤原閔男

研修・親睦委員長 前田外美子 広報委員長 濱口浩平

総務委員会 岡本浩一、明石美奈子、中野剛、永井千賀子、益田信行（5名）

企画委員会 藤原閔男、大橋一喜、田中昭夫、松下秀明（4名）

研修・親睦委員 前田外美子、近藤栄一（顧問）市河保俊、中塚昭三（参与）
稲田堅太郎、伊藤康二（休会）（6名）

広報委員会 濱口浩平、伊藤督夫、川本祥子、長谷川一彦、濱口日出夫（5名）



例会風景



役員会

第二部 記念講演

テーマ「巨大商社鈴木商店と播磨」

講師：神戸新聞社・執行役員 姫路本社代表 村上 早百合氏

講師は今はやりのジェンダーフリーの女性だが意外にもリュックを背負って登場。鈴木商店という名はほとんどの会員が知っていた。高齢者ばかりが会員なので。若い人は中内さんのダイエーでさえ知らない。ましてや神戸発祥といえども鈴木商店のことはほとんど知られていない。講師は神戸新聞に神戸港開港 150 周年を記念して特集記事を連載した『遙かな海路』という企画のリーダーであり連載の後、本を出版した執筆者です。鈴木商店と神戸新聞はつながりがある。

○鈴木商店とは

1874 年初代・鈴木岩次郎が神戸、弁天浜で創業、台湾産の樟脳や砂糖を扱う。初代岩次郎の急死のあと妻、鈴木よね、が経営一切を大番頭の金子直吉に託し発展させる。それが大成功し売上は当時の GNP の 1 割に匹敵。今のトヨタも及ばない。関係の企業はあらゆる分野に及ぶ。

○小説に描かれた鈴木商店

書籍としては 1200 冊に及ぶらしい。城山三郎著『鼠』、玉岡かおる『お家さん』が有名。

○鈴木商店の歴史

創業のころ台湾の樟脳、砂糖を扱っていた。初代が亡くなったあと金子直吉が受け継いだ。彼は教育を受けていなかったが大変優秀であった。土佐出身の我が国経済界の偉人二人、岩崎弥太郎（三菱・創業者）と金子直吉で金子の方が優れているとの評価もある。さまざまな企業を設立。

神戸製鋼所、日本セルロイド、帝国麦酒、播磨造船所、帝人、双日など 80 に及ぶ事業。様々な商品を扱う貿易商として日本各地、台湾、ロンドンなど世界的な拠点網を確立、そのあまりの急成長に妬みを買ったのか米騒動の際に焼き討ちににあう。その時隣り合わせていた神戸新聞の社屋も焼け落ちたそうである。

昭和 2 年取引銀行の破綻で資金調達が不能となり事業停止、清算。

取引銀行が台湾銀行だけだったのが災いしたと言われています。

今も鈴木商店のながれをくむ会社が多数あります。神戸製鋼、サッポロビール、昭和シェル、双日、など。

○鈴木商店と播磨

これは何といっても鈴木よねの存在。彼女は姫路市米田町の仏壇の塗師の娘として生まれた。最初の結婚に敗れ神戸の砂糖商の鈴木岩次郎と再婚。岩次郎が亡くなった後、家業を止めず、金子直吉らにすべて任せた。そして大成功した。

彼女は神戸女子商業の設立を支援したり臨済宗のお寺の再興に力を尽くしたりした。鈴木商店の播磨に残した企業として播磨造船所 IHI, ダイセル, 日輪ゴム, 山陽特殊製鋼など。鈴木商店はなくなったが書類上今も事業を起こせるらしい。鈴木商店という名は知っていたが その内容については知らなかったので興味深い講演でした。城山三郎の『鼠』、玉岡かおるの『お家さん』も読んでみたいと思う。 川本祥子 記



ご講演・村上小百合先生

『 姫路南プロバスクラブ・5月例会 』 休会

①例会 5月12日(水) 中止

②5月の誕生 松下会員、中塚参与

③役員会 12日 13:00～ 4F “梅の間” にて8名参加、

④6月例会 9日(水) 12:30 よりホテル日航3F 「萩の間」

卓話 南ロータリークラブ岡本会長様

⑤役員会 9日 AM10時～4F “梅の間”

⑥全日本プロバス協議会 全国大会・五所川原 8月8日、中止に決定

※研修親睦委員会 ①親睦ゴルフ会 5月24日 白鷺G・Cにて開催

※会 計 ①ニコニコ報告 南ロータリークラブ様(お祝い) 近藤栄一(総会開催)、
中野剛(83歳、ロータリより会長様を迎えて) 明石美奈子(総会) 大橋一喜(ご講演に感謝) 川本祥子(入会5年) 永井千賀子(総会) 前田外美子(総会)
会員有志(食事会残金) 濱口浩平(ドングリ部主に感謝)

◎役員会開催 5月12日 13:00～13:45 4F “梅の間” にて8参加

①例会 5月12日(水) 中止

②5月の誕生 松下会員、中塚参与

③役員会 12日 13:00～13:45 4F “梅の間” にて8名参加、

④6月例会 9日(水) 12:30 よりホテル日航3F 「萩の間」

卓話 南ロータリークラブ岡本会長様

⑤員会 9日 AM11:00～4F “梅の間”

⑥全日本プロバス協議会 全国大会・五所川原 8月8日、中止に決定

⑦赤穂プロバスクラブより新役員のお知らせ 市川博会長以下8名

⑧姫路南ロータリークラブ 5月は休会

※会 計 ①ニコニコ報告 6月に合わせて報告致します。



役 員 会 風 景

『 食 事 会 』・開催

濱口浩平 記

日時 令和3年3月31日(水) 17:30~20:10 会場 播磨旬菜”菊屋”

菊屋が3月末で一時、閉店になるので最後の日に食事会を開催しました。

会費 ¥5,000- 参加者 13名(中野、近藤、中塚、市河、明石、前田、永井、藤原夫妻、長谷川夫妻、濱口夫妻) 中野会長の乾杯の音頭でスタート、美味しい会食を堪能しました。永井さんよりお土産にお菓子を頂きました。厚く御礼申し上げます。会費が少し余った分はニコニコに入れます。最後に玄関前で記念撮影して解散しました。

以上



『4万 km を歩いた男、伊能忠敬の「人生二度有り」』（シリーズその8）

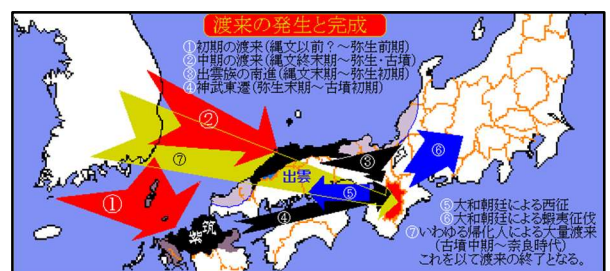
松下秀明記

出雲の日本神話とヤマトの渡来人が繋がっているのでは？

少し余談になるが、渡来人の歴史を振り返ってみたい。渡来人のルートはいくつかあるが、出雲国南下ルートが神秘的で面白い。さて、中国や朝鮮半島の文化や技術を持った渡来人は、いきなりヤマト(飛鳥)に来たのだろうか。私はNHK 歴史ヒストリアの「日本書紀 1300 年日本成立の物語」を見ていて、『日本書紀』の神話の時代と繋がっているのではないかと推測した。「国譲り」の神話は、アマテラスオオミカミが地上の世界を気に入って、使者のタケミカヅチがオオクニヌシと戦って国を譲ってもらった。国を譲る代わりに出雲に立派な宮を作ることを約束した。それが、古代出雲大社本殿であると説明されていた。『日本書紀』にも『金輪御造宮差図』に、1つの基礎は柱が3本で直系3mあり、本殿までの階段が100mあったことが記載されているという。その証拠が2009年、出雲大社の発掘で出土した。9つの基礎の上に社殿があり、高さは45m、階段は100mと推測された。古代の文献を証明したのであった。この本殿も渡来人が作ったといわれている。

出雲で出土した「絵画土器」にその様子が描かれている。土器には本殿と階段の絵や、手漕ぎ船が描かれており、朝鮮から渡来人が渡ってきたことが分る。古代の出雲は宍道湖が内海となっており良港であった。朝鮮とは数百キロ離れていたが、朝鮮半島の東は北から南下する寒流が流れており、丁度出雲地方に到達していた。今でも海岸に韓国からの漂流物が流れ着いている。

さらに、それまでの出雲の古墳は四隅突出型古墳であったが、国譲りの後はヤマト地方の前方後円墳に変わってしまっている。2つの古墳の用途はまったく違っていた。つまり「国譲り」とは、ヤマト王朝が出雲を統一するために征服したことを神話化したものであった。弥生時代は出雲が日本で最強の王国であった。何故なら、朝鮮半島から砂鉄を求めて渡来人がやってきて、同時に製鉄の技術を出雲の人に伝えたからである。あくまで私の推測に過ぎないが、出雲に来た渡来人と農業や鉄器、建築技術をヤマト政権は飛鳥に持ち帰ったのではないかなと思う。何故なら、出雲にはヤマト政権が必要なものが全て揃っており、飛鳥地方にはそれらが集合して工業団地が出来たのではないかな。その飛鳥を統治していたのが蘇我氏であった。渡来人の来日ルートはいくつかある。私は古代において渡来人がいきなりヤマト王国の、しかも一番南端に来たとは思えない



。やはり沿岸に拠点を作り、東進や南進をしたのではないか。そのルートの一つに上記の出雲王国が有望である。その証拠に金を溶かす「るつぼ」が明日香で発見されているが、1999年、出雲で明日香より古い金の「るつぼ」が発見された。

余談だが、2500 万年前、日本はユーラシア大陸の東端に繋がった陸地であった。プレートの移動で亀裂が入り海水が流れ込んできた。1500 年前にさらに裂け目が広がり、東端が引きちぎられて日本の原型である島々が出来上がった。その後、フィリピンプレートが伊豆諸島の火山群を北に押し上げて、東と西に分かれていた日本を一つに繋げたのである。そして富士山は3つのプレートの交点に出来上がった火山であった。プレートの移動と火山群がなければ美しい富士山も今の日本も誕生していなかったのである。

もう一つ話題。大島火山群が本州に衝突した時、オオシマザクラと本州のエドヒガンが交配して、互いの長所を持ったソメイヨシノが誕生したそう。火山の衝突がなければ美しいソメイヨシノの花見は実現しなかったということだ。

なぜ蘇我入鹿は幼なじみの中臣鎌足に殺されてしまったのか？

NHK 古代史ドラマ「大化の改新」を見た。中臣鎌足と蘇我入鹿は同じ旻（みん）先生の学堂に通っていた。入鹿は学堂一の頭の良さを認められていた。旻先生は中国系の渡来人で 608 年第三回遣隋使として小野妹子と随に入り、24 年間唐で勉学に励んだ人で「周易」を講じた。しかし、鎌足の素行が悪く、師から仏教が日本に渡ってきた理由を調べる宿題を罰として与えられた。困った鎌足は入鹿に相談したら、蘇我氏の邸宅の書庫に『国記』などの資料があると教えられ、そこを訪れた。壁一面に木簡や巻物が置かれ、初めて『国記』を見ることができた。これが後に役に立つのである。

入鹿は蘇我一族の興亡を背負っていて、それを維持しようと横暴的になっていた。その時対抗者で人気の高い山背大兄王を死に追いやった。鎌足は幼なじみの入鹿の人格が変わっていくことを案じていた。鎌足は一度政治の世界から身を引いていたが、入鹿の横暴を見逃せなくなり、中大兄皇子の力を借りて暗殺した。世にいう乙巳の変(645)である。父親である蘇我蝦夷は屋敷に火を放ち自害した。この蘇我氏の野望を引き継いだのが後の藤原氏である。

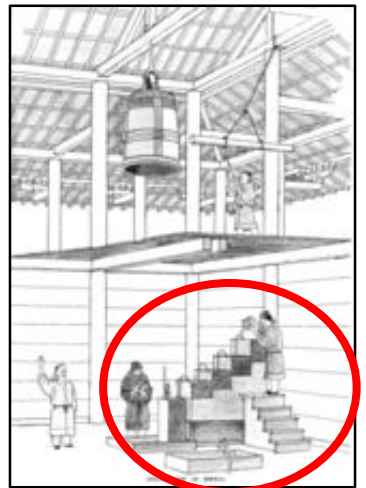
第二期トロイカ体制の活躍と大化の改新の完成

私は大化の改新で第二次トロイカ体制(私の勝手な命名)が出来上がり、中央集権国家作りがより完成度の高いものになっていったと思っている。そのメンバーは、天智天皇(中大兄皇子)と弟の天武天皇(大海人皇子)、その妃の持統天皇である(4人目は藤原不比等)。



まず、軽皇子が孝徳天皇となり、中大兄皇子は皇太子となった。646年に改新の詔が發布され4つの基本方針が定められた。特に注目するのは660年、日本初の戸籍である「庚午年籍(こうごねんじやく)」の制定である。中央の役人が一人一人聞き取り、朝廷が部民たちに名前を与え、天皇への求心力を高めた。この数年後、有名な白村江の戦いが発生するのである。責任者として中大兄皇子が出兵したが、後ろ盾であった斉明天皇が崩御し、戦いにも敗れてしまった。

また、滋賀県近江神宮の御祭神天智天皇は、その671年4月25日に漏刻(赤丸内)を作り、大津宮の新台幣に置いて鐘鼓を打って時報を開始された。その10年ほど前、斉明天皇の660年にも中大兄皇子が漏刻を作られたとの記述があるが、時の記念日は天智朝10年4月25日の御事蹟を太陽暦に換算した日で、大正9年に6月10日に記念日として制定した。漏刻とは水時計のことで、この時代から時間に関する意識が芽生えてきたのであった。これが



暦と相まって、国史の編纂や大規模な建屋の建築、占星術などに生かされてくるのである。余談であるが、政治改革の一つである「薄葬令」により、大型の古墳造営の終焉を迎えた。おかげで、これ以降は大きな仏教寺院や大仏などの大型建設に国家、国民の勢力を注ぎ込むことが出来るようになった。

中大兄皇子は斉明天皇の死後、天智天皇(668)として即位したが、このころにはこれまで右腕として活躍した弟の大海女皇子との中が冷え切っていた。中臣鎌足は何とか両者の中を取り持ったが、狩りの途中で落馬し、背骨を損傷して亡くなってしまった。亡くなる前日に天智天皇は鎌足の功績を称えて大織冠(だいしゅっかん)を受け、内大臣にも任命し、そして「藤原」の姓を与えた。実際、初めて藤原を名乗ったのは息子の不比等であったが、鎌足は明治まで藤原一族が1000年繁栄する始祖となった。



天智天皇はかなり聡明な人であったが、人格的に問題があり、多くの反対勢力を抱えていた。天智天皇はやがて古代史最大の内乱、壬申の乱(673)で大海人皇子(天武天皇)に滅ぼされてしまう。天武天皇は天皇の権力を高めるため、さらに大胆な改革を打ち出した。その政治改革をいくつかあげると、その一つが、官僚制の整備である。地方の豪族にも光を当て、冠位を二十六階から四十二階に増やした。さらに、中央の豪族に対しては「八色の姓(やくさのかばね)」の制度を作り、有力な豪族たちを守った。ノンキャリア組とキャリア組の誕生である。



と、その一つが、官僚制の整備である。地方の豪族にも光を当て、冠位を二十六階から四十二階に増やした。さらに、中央の豪族に対しては「八色の姓(やくさのかばね)」の制度を作り、有力な豪族たちを守った。ノンキャリア組とキャリア組の誕生である。

二つ目が人々の拠り所となる物語を作ることと、海外への日本の国威を示すことであった。つまり、国の歴史書の編纂である。乙巳の変で『国記』や『天皇記』など重要な歴史書が焼失してしまった。そこで新たに、天武天皇の考えをまとめた『古事記全三巻』は712年に完成し、客観的な対外向けの歴史書『日本書紀全三十巻』は720年に完成した。『古事記』は創業者の物語で、『日本書紀』は社史と、現代風に解説する学者もいる。ただし天武天皇は686年に崩御してしまう。その後、藤原不比等らを中心に701年、大宝律令が完成する。これで国家統治の基本である律(刑法)と令(行政法)の法典が整備された。さらに不比等が引き継ぎ国書の完成を目指したといわれている。

余談であるが、『国記』を持ち出したのは行基の師である道昭の父、舟氏の船史恵尺(ふねのふみと えさか)である。『日本古代の豪族と渡来人』の著者、加藤謙吉氏は次のように述べている。「道昭は河内国丹比群野中郷を本拠とした舟史(連)の出身である。恵尺は『日本書紀』に乙巳の変の際、蘇我蝦夷が死に臨んで天皇記、国記、珍宝に火を付けたと記載・・・」とあるが、恵尺は『国記』の編纂に関わっており、一方でクーデター派の命令で密偵的な働きをしていたのではないか、という説も存在するという。『国記』だけは恵尺が火中から拾い出し、中大兄皇子に差し出された。ただ、中大兄皇子がこのような大切な『国記』を保全しなかった(現存しない)のは、後世に都合の悪いことが書かれていたとも言われている。なお道昭は、唐に渡って仏教を学んだ僧侶で、その師匠はなんと玄奘三蔵だという。

三つ目は、貨幣制度の導入である。これまでは708年に発行された「和同開珎」が最も古いとされていたが、1999年、飛鳥池工房遺跡から富本銭が発掘された。『図解古代史』(正美堂出版)によると、

「「富本」の名は、後漢の光武帝が前漢時代の貨幣制度を再構築した際に、「富国(民)の本は食貨(食事と貨幣の意味)に在り」という文言が用いられたという故事にちなんでいる。(中略)出土数が少ないことから、厭勝銭(えんしょうせん)と呼ばれる、まじない用の貨幣だったとする説もあるのだ」と解説されている。

奈良県立万葉文化館の主任研究員吉原啓氏の論文によると、「富本銭の銭面の左右に配された七つの点は、日・月・木・火・土・金・水を総称する陰陽五行の「七曜」に基づくとしている。そして円形方孔銭形は天円地方を象徴し、さらに乾坤(けんこん:易の卦(け)の天と地)をかたどるものという考えにより、陰陽五行の調和の取れた姿を表わすという。その上で、上に陽儀、下に陰儀、その間に土を置き、火・金・水・木をその周辺に配した両儀四象生成図が富本銭の「七曜」と一致するとして、陰陽五行のシンボルとして七曜文が採用されたという」と説明されている。天武天皇が陰陽五行説に関心が深く、陰陽寮を設置し、占星台を建設したことで、中国の徳治思想と天人相応を強く意識したことが伺える。

何故、飛鳥時代や奈良時代に暦や時計が必要だったのか？

日本は唐などから5つの漢暦を持ち込んでいる。最初の暦は「元嘉暦」と呼ばれるもので、692年施行となっているが、推古天皇の暦日管理は観勒が持ち込んだ602年頃から始まっているらしい。3番目の「大衍暦」は吉備真備が735年に唐から持ち帰ったものだ。この時、冬至の影を計る鉄の棒(ノーマン)も持ち帰っている。5番目は渤海使・烏孝慎(おうこうしん)によってもたらされた。遣唐使ではない。この「宣明暦」は、江戸時代の渋川春海による日本初の「貞享暦」まで、800年余り使われ続けることになる。

『暦の雑学事典』(吉岡安之、日本実業出版)によれば、『日本書紀』によれば、すでに継体天皇7年(513)には、五経博士・段揚爾(だんように)が来日している。(中略)これをさかのぼる履中天皇4年(403)には、諸国に記録官として国史(くにのふひと)が配置されている。彼らは応神天皇の時代に来日して帰化した百済の阿直岐(あじき)や王仁(わに)、漢人の阿知使主(あちのおみ)の子孫といわれる。国史というのは朝廷記録や外交文書に携わる文官であり、漢字の読み書きはもちろん、年号・日付の正確な記載が要求される。どうやら朝廷は最初は帰化人の助けを借り、のちには朝鮮半島から専門家を招いて、最新の学問・技術の導入を図ったようだ」と書かれている。暦の最初はやはり渡来人からであった。太子と馬子が最初の国史を作ったと述べたが、天武天皇の国史編纂も対外的な威信を表わすために絶対必要なものであった。同時に暦の正確な作成は必要不可欠であった。1年は暦法によって正しく区分され、二十四節気その他の暦日上の事柄も



、毎日の吉凶も暦本によって正確に予測されることが大切であった。

余談であるが、古代エジプトでは暦や時刻が行き渡っていた。ピラミッドの建設には毎日 7000 人もの労働者とスタッフが働いた。全員が組織的に作業をするには暦と時刻が不可欠であった。当時は勤怠管理表もあったという。休暇の取得には理由も書かれていたらしい。日本の古墳や大型建設にも、当然暦と時刻が必要であったことは明白である。675 年、天武天皇によって陰陽寮が設置され、陰陽師が官職となった。当時の陰陽師は、占筮、地相、天体観測、占星、暦（官暦）の作成、吉日凶日の判断、漏刻のみを職掌としたとされる。718 年、養老律令において、中務省の内局である小寮としての「陰陽寮」が設置された。

同じく『暦の雑学事典』によると、「**天皇親政の理想的な政治を実現しようとした天武天皇は、告朔(こくさく)の儀を重視、朔(1 日)には官吏(かんり)が招集され、朝礼あるいは月例会議のようなものが行われた。(中略)『日本書紀』によれば、675 年の正月に、「初めて天星台を興す」という記述がある。これによって天武天皇は占星術に凝っていたなどといわれることがあるが、当時の占星術は今日の星占いのようなものではない。占星台というのは天文台であり、暦法の整備のためにも必要とされたのだろう**」とある。飛鳥の里にこれまで用途が謎とされてきた「益田岩船」と呼ばれる巨石が、日本初の官立天文台らしい。

鸕野讃良皇女(うののさらら ひめみこ)は 686 年、夫の天武天皇が亡くなると皇位継承者の草壁皇子も亡くなり、4 年後の 690 年に持統天皇として即位した。持統天皇は天武天皇の意思を引き継ぎ、次々と改革を推し進め、新都藤原京の完成、本格的な大宝律令の完成、さらに遣唐使が再開されたが、同年持統天皇は崩御された。その後も、藤原不比等などによって養老律令の制定、国史の編纂などが引き続き完成された。

何故、聖武天皇は大仏(盧舎那仏)を造立したのか？

奈良時代は一言で言うと、中央集権国家の完成と仏教の布教による国家基盤の強化、いわゆる鎮護国家思想の実現である。第二次トロイカメンバーから引き継いだ聖武天皇は、精神的に病んでいた。10 年近く続いた疫病の流行や干ばつによる餓死、皇族間の争いなどは、自分に徳が無いことが原因だと考えていた。藤原 4 兄弟をはじめ、朝廷の重鎮たちも次々亡くなった。そんな中、突如、都を転々と遷都する放浪が始まった。恭仁京、難波京、紫香楽宮、平城京と 5 年間で遷都を繰り返し、民衆は疲弊してしまった。

自らの無力さを悟ると「仏教によって国を守る」という仏教の教えをさらに深く信じるようになった。平城京の邪気を払うため 700 人の僧を集めて読んだお経の 1 つが「金光明最勝王経(こんこうみょうさいしょうおうきょう)」と呼ばれる經典だった。「この經典を供養して、教えを広めてくれれば国は守られるよ」というようなことが書かれている。それを受けて、741 年、全国に国分寺と国分尼寺建立の詔を発令した。この国分寺の総本山が東大寺で、正式な名称は「金光明四天王護国之寺」と呼ばれている。

その後、天皇や貴族に華嚴経(けごんきょう)を説いていた良弁が、大仏を造立すること進言した。同時に、玄昉の夢であった唐で見た大きな盧舎那仏の造立を、病気治療中の天皇の母、宮子にも伝えていた。宮子は息子が悩んでいるのを見て盧舎那仏造立の進言をした。玄昉は雲岡石窟の妹来座像(13.7m)や龍門石窟の盧舎那仏像(17.14m)を見ていたのかもしれない。聖武天皇自身も河内の知識寺(現石神社)で光り輝く盧舎那仏を見て感動していた。

聖武天皇はこの難局を乗り越えるため、宇宙を象徴するような巨大な大仏を造る意志を固め、743 年紫香楽宮で大仏造立の詔を発した。最初は紫香楽宮で工事が始まったが、山火事が頻発し、大地震も起り、工事を中断し平城京の東大寺に造立することに変更した。しかし、民は疲弊しており大勢の人を集めることは出来ないと思った。そこで民衆に人気のある行基を呼んで造立の責任者にしようとした。しかし、これまで朝廷に迫害されてきた行基は拒否した。そこで真備は行基の弟子たち、いわゆる正式な僧侶でない

優婆塞(うばそく)700名(一説では数千名)を僧侶にする提案をして、人夫の確保を図った。すぐに行基と真備は聖武天皇に会いにいき、巨大な盧舎那仏造立の理由を聞いた。天皇は幼い時、父が病に倒れ、屋敷の近くの巨木に毎日祈りを捧げた思い出があるからだと言った。行基は渡来人の国中公麻呂を造立の総指揮官に据え、かつて経験したことのない巨大な金銅仏の造立に着手した。工事は難航しながらも進んだが、聖武天皇が病気で伏せがちとなり、孝謙天皇は752年、まだ金塗りも終わっていない大仏の開眼供養を執り行った。『人物日本の歴史』(監修 芳賀登、学習研



究社)によると、「開眼の日。この日のようすは『続日本紀』という本にかかっている。(中略)聖武上皇が、光明皇太后・孝謙女帝につきそわれ、大仏の前の布をしいた板殿にすわり、役人たちは正月元日と同じ礼服をきて、そのうしろにいならんだ。高い台上の菩提僧正のもつ筆からは、開眼縷(かいげんる)とよばれるひもが、一二本も長くのび、その先は聖武天皇、光明皇太后、そして孝謙女帝をはじめ、主だった役人たちの手に握られた。菩提僧正のもつ筆が、おもむろに大仏に目をかく」。菩薩僧正とはインドの高僧である。式典には国内外から1万人が招かれたという。

今回は、さらに吉備真備の働きと、陰陽師安倍晴明の活躍をご紹介します。 以上

姫路南プロバスクラブ・第41回・親睦ゴルフコンペ

白鷺ゴルフ倶楽部 5月24日

順位	氏名	アウト	イン	グロス	H D C P	ネット	その他
優勝	市河 保俊	45	49	94	20.4	73.6	
準優勝	松下 秀明	42	42	84	9.6	74.4	
3位	中塚 昭三	49	45	94	9.6	76.0	
4位	前田外美子	51	50	101	24.0	77.0	
5位	近藤 栄一	49	48	97	19.2	77.8	
B B	中野 剛	45	50	95	16.8	78.2	
7位	濱口 浩平	58	61	119	32.4	86.6	



みんなが主役、

みんなが脇役

『ヤマユリ』 6月30日

“ 思いやり・純潔 ”

楽しくなければ

プロバスではない

川 柳

乱れ髪 今は乱れる

髪もない

紙とペン 探してる間に

句を忘れ

長谷川一彦 選



《 編 集 後 記 》

新型コロナウイルス・感染が第四波で関西地方は突出しています。
何とかならないものなのでしょうか。お互いに十分気をつけましょう。
今後とも宜しくお願い申し上げます。

第 105 号 令和 3 年 6 月 9 日 姫路南プロバスクラブ（二水会）

連絡先 姫路市城北新町 1-2-26

岡本浩一（総務委員会）

電 話 079-224-3366（F A X 共）

発行：広 報 委 員 会・濱 口 浩 平